牛がそんな事は申しませぬが、上から大蒲團を着せて火を消して仕舞ました、そんな事は一寸とも御存知無いあばゝの茂平、世界中の色男は俺やと云はぬばかりに、鼻の先へ頭冠りを致しまして、

「ォ、寒む（色も白酒、愛こぼれ梅、腰はすんがり柳かげ、わたしや味淋で苦勞を紫蘇酒、折角來たのに泡盛となんと燒酎生荷酒、ほんに身も世も霞酒、そんなに私が嫌なれば髮をおろして尼酒となるわいな）裏口まで來たで、切戸が開てるかしらん（コトン）開てる、やつぱり玉公俺の事を想ふてよつたんやで、お玉の部屋は臺所の次の間、此所から忍んで、オ、ソウヂヤ。」（端唄忍ぶ夜）

大經寺の茂兵衛みたいな氣になりよつて、

「ア、暗……（ゴツン）ア、痛、戸が閉たあるナ、（ガタン）甚い音がする、ヨシ小便かけたろ（ジジウジユ、シウー）（スウー）戸が開いたぜ（鳴物色めきトツツルガン）眞暗やナア、オイ玉チヤン、俺や〳〵（フウー）甚い鼾やなア、何處や……ア、此處やな、フワア――とうない大きな體やなア、何時も細いのに、ハ、ン解つた寢太りと云ふのやな、あれだけの容色をして居て年頃で嫁入もせず、養子も貰はんのはこうゆう病氣があるさかいやな、だんない俺さへ辛棒を仕たら宜いのや、蒲團を脱ぎ、ヨツトショ、なんやまだ毛氈を着てんのか、是も脱ぎ、嫌か堅う卷いてるなア、兎も角も話がある、どつちが頭や、成程此處やな、さすが都育や下げ髮やな長い毛やな――コレ下げ髮でしばいたり、てんごしないなア、默つて居んと何とか云ひんかコレ玉チヤン、びんつけをどつさり附て宜い香やな……ア、臭、こら俺が惡い畫畑で仕事を仕て居たので香がうつてんのやろ、此處と違ふか……成程此方や。笄をさしてるな、太い笄やなア、是は一角の丸棒やな、俺の詰つた時のやりくりに貸てや、ナア玉チヤン默つて居んと何とか云ふてんか、これ玉チヤン。」

牛の角を持て振り廻したんで、牛も今迄辛抱してたが氣持が惡うて堪りまへん。ムク〳〵と起き上つて。

「モーウ。」

「フワーイ……オイ皆寄場に居るか。」

「オイ茂平やないか、どうした。」

「お玉の家へ行て來た。」

「偉い、お玉をウンと云はして來たか。」

「イーヤ、モーウと云はした。」

（終り）